

# 一条小原遺跡

福岡県筑後市大字一条所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第78集

2007

筑後市教育委員会

いちじょうこはらいせき  
一条小原遺跡

—第1次調査—

2007

筑後市教育委員会

## 序

本書は、平成18年度に筑後市教育委員会が実施した「一条小原遺跡」埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

当地は、筑後市の最北端、久留米市との市境にあり、標高13～14m位の低位段丘上にあります。北部には、耳納山地から派生する一級河川「広川」が西流し、南部には、石人山古墳（前方後円墳）をはじめとする400基以上もの古墳が点在していたとされる八女丘陵が展開します。また、当調査区西端を古代官道である「西海道」と江戸時代に参勤交代として利用された薩摩街道（坊津）が貫通することが知られています。

さて、当遺跡は、店舗新設工事に伴って新たに発見された遺跡であり、今回の発掘調査によって弥生時代を中心とする集落周辺の遺跡であることがわかりました。本書が、地域における文化財保護思想普及の一助となり、また、学術研究の資料として広く活用されることになれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご協力を賜りました関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸 一男

## 例　言

1. 本書は、筑後市教育委員会が平成18年度に実施した「一条小原遺跡（第1次調査）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した発掘調査の原因、調査機関等の調査に関わる経過については、「(1)はじめに」で記載した。
3. 発掘調査に関して、現地調査から報告書作成に至るまでの諸作業を筑後市教育委員会が主体的に行い、整理作業の一部は（財）元興寺文化財研究所に委託した。
4. 発掘調査で出土した遺物並びに記録した図面類・写真類等は、当教育委員会で所蔵・保管を行っている。
5. 調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系（日本測地系）を基準としており、本書に示される方位はG.N.を示している。従って、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものであり、水準についてはT.P.を基準としている。
6. 本書に使用した図面類に関して、遺構実測図は小林勇作が作成し、遺物実測図及び図版添書は（財）元興寺文化財研究所に委託した。
7. 本書に使用した写真類に関して、遺構及び遺物の写真は小林が撮影した。
8. 本書に使用した遺構番号は、頭に調査次数並びに種別記号を表記し、種別は以下の記号を用いた。  
種別記号：「SB - 掘立柱建物」「SD - 流路・溝」「SI - 竪穴住居」「SK - 屋内土坑・土坑」「SP - 柱穴・ピット」「SX - 樹木根痕跡・不明遺構」
9. 本書の執筆と編集は小林が担当した。

## 目　次

I .はじめに	1
II .位置と環境	3
III .調査成果	9
(1) 検出遺構	9
(2) 出土遺物	13
(3) 小結	25

## I. はじめに

当地は、店舗建設を予定する筑後市大字一条529-1外6筆（約7,000m<sup>2</sup>）について有限会社ドラゴンズから筑後市教育委員会へ遺跡の照会があった。当地は、既に試掘調査を実施していた場所であり、筑後市大字一条526、530-1、530-4に遺跡が存在することを速やかに伝えた。その後、有限会社ドラゴンズと協議を重ね、店舗建設工事に伴う緊急発掘調査として遺跡が破壊を受ける箇所の約1,466m<sup>2</sup>を調査することとなり、平成18年4月3日に発掘調査受託契約を締結した。

発掘調査は小林勇作が担当し、平成18年4月20日から同年6月21日の約2ヶ月間実施し、考古学的手法による表土剥ぎ（有限会社徳光建設へ委託）・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影・報告書作成作業（遺物実測・復元・浄書作成等は財団法人元興寺文化財研究所へ委託）を行った。調査の結果、竪穴住居・掘立柱建物・流路・溝・土坑等の遺構が確認され、主に弥生土器・須恵器・土師器・石器などの出土遺物を得ることができた。



Fig.1 一条小原遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

### 【調査組織】

#### 1. 発掘調査

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
々	主査	綾部 純
文化スポーツ係		田中 純彦
々		永見 秀徳
々		小林 勇作 (調査担当)
々		上村 英士
々		阿比留土朗 (嘱託: ~ 6/30)

## 2. 発掘調査参加者

### 発掘作業員

石橋香代美・井上むつ子・今山美咲子・植田 勝子・内田 征一・内野 康隆・江崎トシ子・  
加藤 礼子・蒲池 京子・河添 幸子・北村 由子・隈本 千城・近藤 一昭・下川 義文・  
角 里子・中尾 隆典・中村 三男・橋本 高登・原 秋子・堀田 武利・田島 和弘・  
田島 好江・田平 利彦・藤田 雅代・田島ヤス子・辻 名草・辻 勝・堤 義弘・  
富永八重子・富安 英子・野田 勝子・馬場千鶴子・原 清隆・藤田 信雄・松尾喜代美・  
水町 文彦・三瀬美樹子・満川香代子・三宅加奈子・牟田佐恵子・村上 愛子・本村 弘年・  
山田 龍助・渡邊 泰子

## 3. 整理作業参加者

### 整理補助員

丸山裕見子・猿渡 式子

### 整理作業員

野口 晴香・野間口靖子

発掘調査から報告書作成に至るまでの間、以下の方々にご指導・ご鞭撻を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

岸本圭(福岡県教育庁)、白木守・小澤太郎(久留米市役所)、狭川真一(財団法人元興寺文化財研究所)

## II. 位置と環境

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縱断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市域地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。当遺跡は、筑後市の最北端部、耳納山地から西流する広川の左岸部に位置し、標高13～14m位の低位段丘上に立地する。

次に当遺跡の周辺を歴史的環境から概観する。

縄文時代では、当地から南方約2kmの辺りに鯉ノ谷遺跡が所在する。当遺跡は縄文時代の散布地として周知の包蔵地に登録されている遺跡であるが、未調査のため詳細は明らかではない。

弥生時代の遺跡は、当地の西方約1km地点に齋原墓群跡の西牟田遺跡が確認されている。当遺跡の詳細は明らかでなく、また消滅しているため現在確認することはできない。

古墳時代では、前方後円墳や円墳、窯跡が点在する八女丘陵が南部に位置する。丘陵上には、筑紫君



Fig.2 一条小原遺跡周辺遺跡分布図 (1/25.000)

磐井の奥津城、九州地方最大級の前方後円墳として著名な岩戸山古墳をはじめ、乗場古墳・善藏塚古墳・鶴見山古墳・釣先古墳・童男山古墳など400基以上もの古墳が点在する。筑後市にほど近い丘陵部には、横口式家形石棺、武装石人を有する前方後円墳の石人山古墳（当地より南方へ約2km）、県内では稀な石屋形を呈する横穴式石室と彩色壁画をもつ円墳の弘化谷古墳（当地より南方へ約2.2km）、八女丘陵最西端に位置した円墳？の十連寺古墳（当地より西方へ約2km）がある。また、当市では竪穴系横口式石室をもつ円墳の瑞王寺古墳（当地より南方へ約1.2km）が著名であるが、既に家屋が建築されているためその姿を見ることはできない。古墳からは鏡や有効円板、馬具といった副葬品が出土しており、馬具の木心鉄板張輪鏡は、朝鮮半島の系譜をひく遺物として特に注目されている。石人山古墳より南方へ1kmの地点には、6世紀中葉に比定されている欠塚古墳（前方後円墳）が所在する。発掘調査は過去に2度（1950年代・平成元～2年）行われており、石人山古墳と同様に造り出しのある前方後円墳と確認された。更に、竪穴系横口式石室を呈する構造であることがわかり、形象・円筒埴輪、小札、ガラス玉といった副葬品が認められている。

古代律令期に大宰府を中心として九州に点在する国府を結んだとされる幹線道路の西海道は、当遺跡の西端を南北に貫通する。当地は、北の御井駅（久留米市）と南の葛野駅（筑後市）の中ほどに位置するものと想定でき、平成9年度に久留米市教育委員会が「西海道（第2次調査）」（註）として報告されている。現地は、当遺跡の南方約350mの地点にあたり、報告書では前後3回の掘り直しと12.5m→11m→9mと縮小する傾向が確認されている。

時代は下り、当遺跡の南方700mには近世の在郷町である「盛徳町」が栄え、現在もその名残りを垣間見ることができる。盛徳町は、近世の主要道路であった薩摩街道筋に立地し、南は現在の国道209号線とほぼ沿うように筑後市内を縱断しながら「羽犬塚宿」へと続く。盛徳町の開基成立年は、元禄元年～2年とみられており、一条村の移出新町であった。元禄元年頃の資料によると、町の規模は南北一百八十間、東西五十四間とみえ、枱形や構口などが備えられていた。町家のほかに生活必需品を供給する商店が立ち並び、酒や油などの製造加工業も盛んであった。

#### 【註】

富永直樹「西海道路（第2次）」「久留米市内遺跡群」 久留米市文化財調査報告書 第140集 久留米市教育委員会 1998

#### 【参考文献】

『筑後市史－第一巻－』 筑後市 平成9年

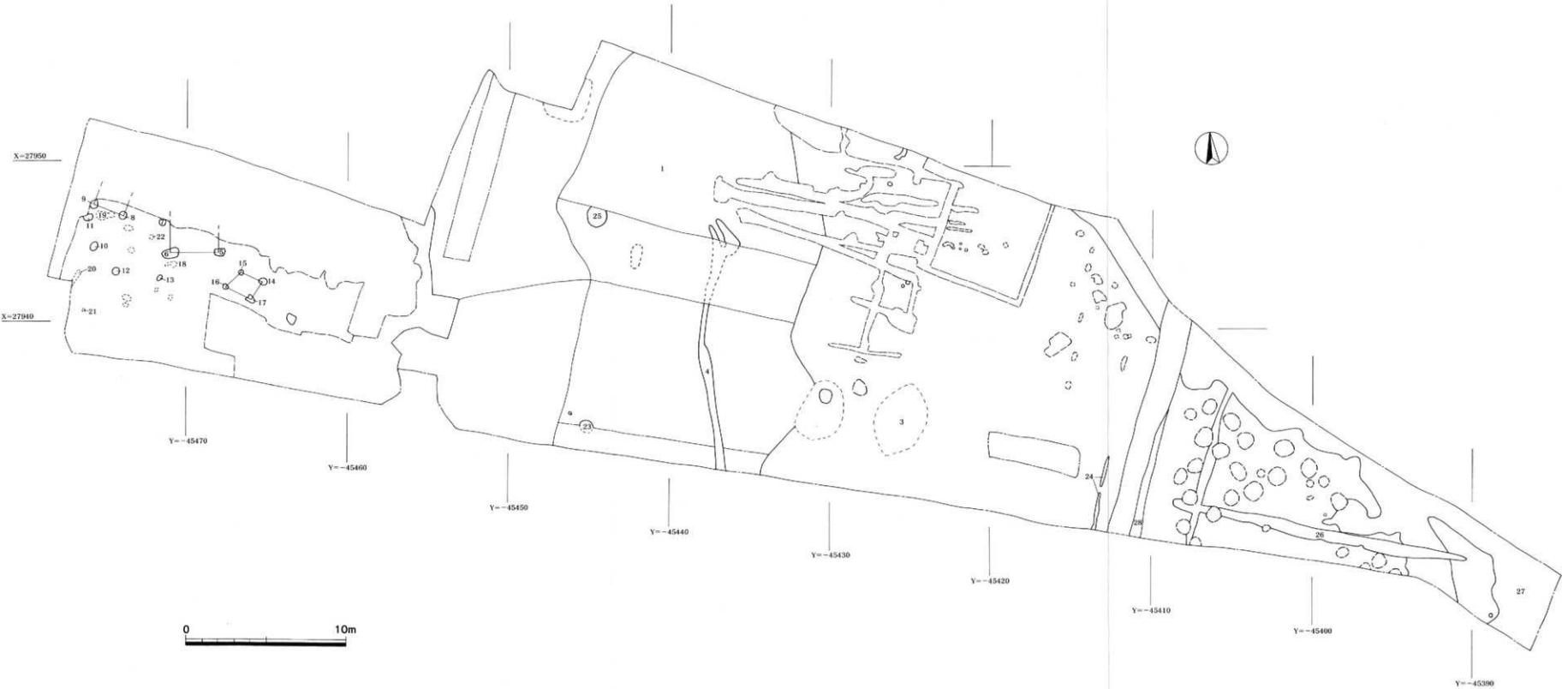


Fig.3 一条小原遺跡遺構略測図 (1/200)

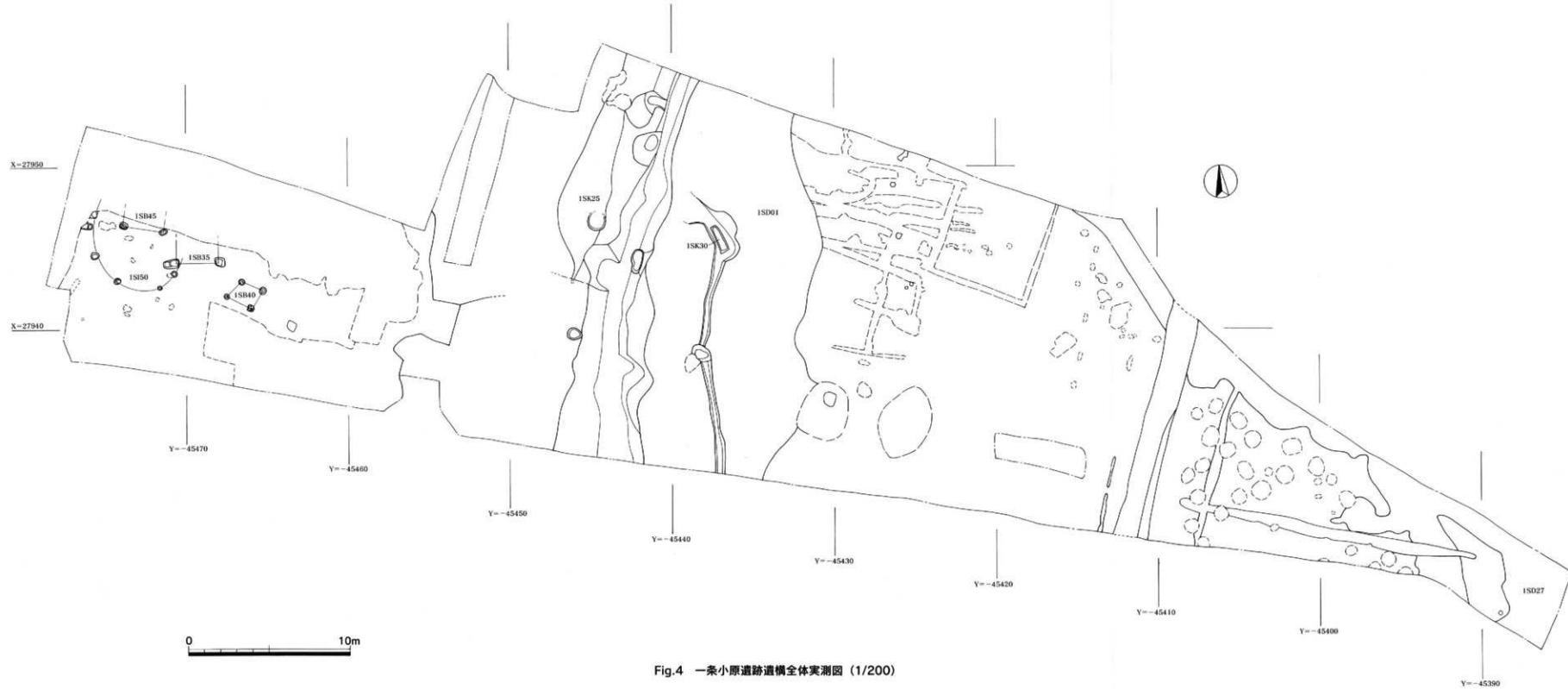


Fig.4 一条小原遺跡遺構全体実測図 (1/200)

### III. 調査成果

#### 古島櫻崎遺跡（第1次調査）

##### （1）検出遺構

###### 竪穴住居

###### 1SI50 (Fig.5, Pla.2)

調査区西端で弧を描くように柱穴P1～5を検出した。残存する柱穴は安定した掘形を呈しており、ほぼ直ぐ下に掘られている状況から、柱は垂直に設置されていたものと想定される。この状況から、検出された柱穴は円形住居に見られる柱穴であったと考えられ、住居径は8m程度に復元される。住居壁となる竪穴は確認されておらず、当該区は著しく削平を受けているものと思われる。柱穴の平面プランは隅丸方形形状または梢円形状を呈し、遺構検出面からの深さは0.20～0.71mを測る。各柱穴間の幅はP1-P2間：1.90m、P2-P3間：2.05m、P3-P4間：2.60m、P4-P5間：1.25mを測り、最も柱間の狭いP4-P5間は住居の入り口部分と考えられる。住居の規模から当該期における竪穴住居の中型クラスと捉えられる。遺物はすべての柱穴から弥生土器が出土した。なお、P4では土師器（片）も認められたが、流れ込みの可能性が考えられる。

###### 掘立柱建物

###### 1SB35 (Fig.5, Pla.2・3)

調査区西端で柱穴P1・2を検出した。P1は方形の平面プランを呈し、深さは0.47mを測る。柱穴底面はほぼフラットな状態であり、埋土中から柱痕跡が確認されている。柱痕径は15cm前後を測り、土層断面では斜方に傾いていることから柱に横方向の力作用が働いたものと想定され、柱抜き取りによる痕跡と考えられる。一方のP2は、平面プランが隅丸長方形を呈し、深さは0.65mを測る。掘形内部にはテラスを認め、底面はフラットである。柱穴東壁付近で径20cm前後の柱痕跡を検出し、土層断面ではほぼ垂直に直立した柱痕層が確認された。P1-P2間は2.60mを測り、建物は北部へ展開するものと考えられる。P1・2から弥生土器が出土している。

###### 1SB40 (Fig.5, Pla.2)

調査区西端1SB35の東隣に位置する。梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。平面プランは、P1・3・4が梢円形、P2は不整円形を呈し、深さはP1・2が0.35m、P3は0.56m、P4は0.50mを測る。P2は内部にテラスを認め、底部には小ピットを認める。P1-P2間：1.73m、P2-P3間：1.35m、P3-P4間：1.35m、P1-P4間：1.30mを測り、方位はN-28° 27' 55"-Eを示す。各柱穴からは僅ながら弥生土器（片）が認められたが、特にP2からは弥生土器（甕・器台）が出土した。

###### 1SB45 (Fig.5, Pla.2)

調査区西端、1SI50の北側で柱穴P1・2を検出した。共に平面プランは梢円形状を呈し、深さは0.40～0.50mを測る。柱穴底面はほぼフラットであり、柱痕跡は確認されていない。柱穴間は2.66mを測り、南部で柱穴を認めないことから建物は北部へ展開するものと考えられる。出土遺物はP7から弥生土器（高环・片）、P8から弥生土器（甕・壺・片）が認められた。

###### 流路

###### 1SD01 (Fig.6, Pla.3～5)

調査区中央で検出した南北方向の幅広い流路であり、僅ながら西から東へと緩やかな弧を描くように確認した。流路は、中心に向かって西斜面は傾斜がやや強めであり、東斜面は極めて緩やかな状態を示す。検出長約24.0m、最大幅約16.5m、遺構検出面からの深さは0.7～1.1mを測る。溝底のレベル差異はほとんどなく、地形的にみると北部に西流する広川河川へと流れ込む流路と想定される。流路に堆積する埋土は、上層から灰褐色土→黒茶色砂質土→黒茶色粘質土を基調とする概ね4段

ループに分別でき、灰褐色土及び黒茶色砂質土からは多くの弥生土器・須恵器等の遺物が出土した。出土遺物のほとんどは、著しく磨耗していることから土砂に混入してローリングし、堆積したものと考えられる。なお、堆積層においては特に発達した砂層は観られることから急激な流水はなかったものと想定される。

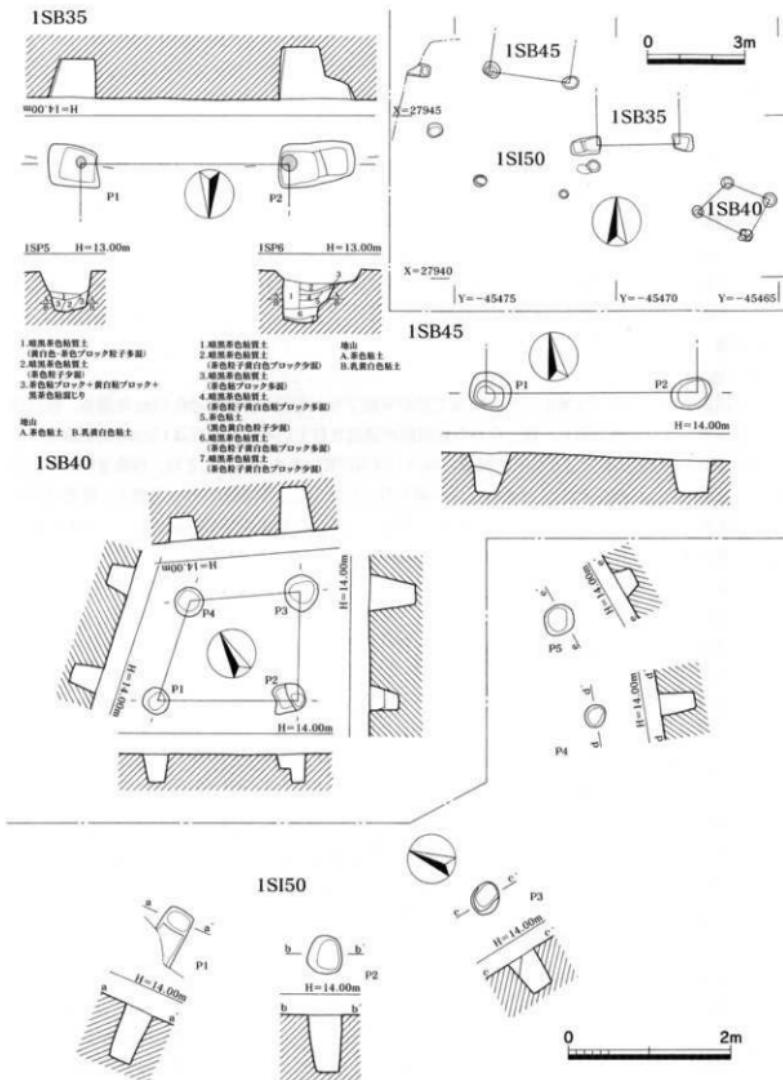


Fig.5 壁穴住居（1S150）、掘立柱建物（1SB35・40・45）実測図（1/60・1/150）

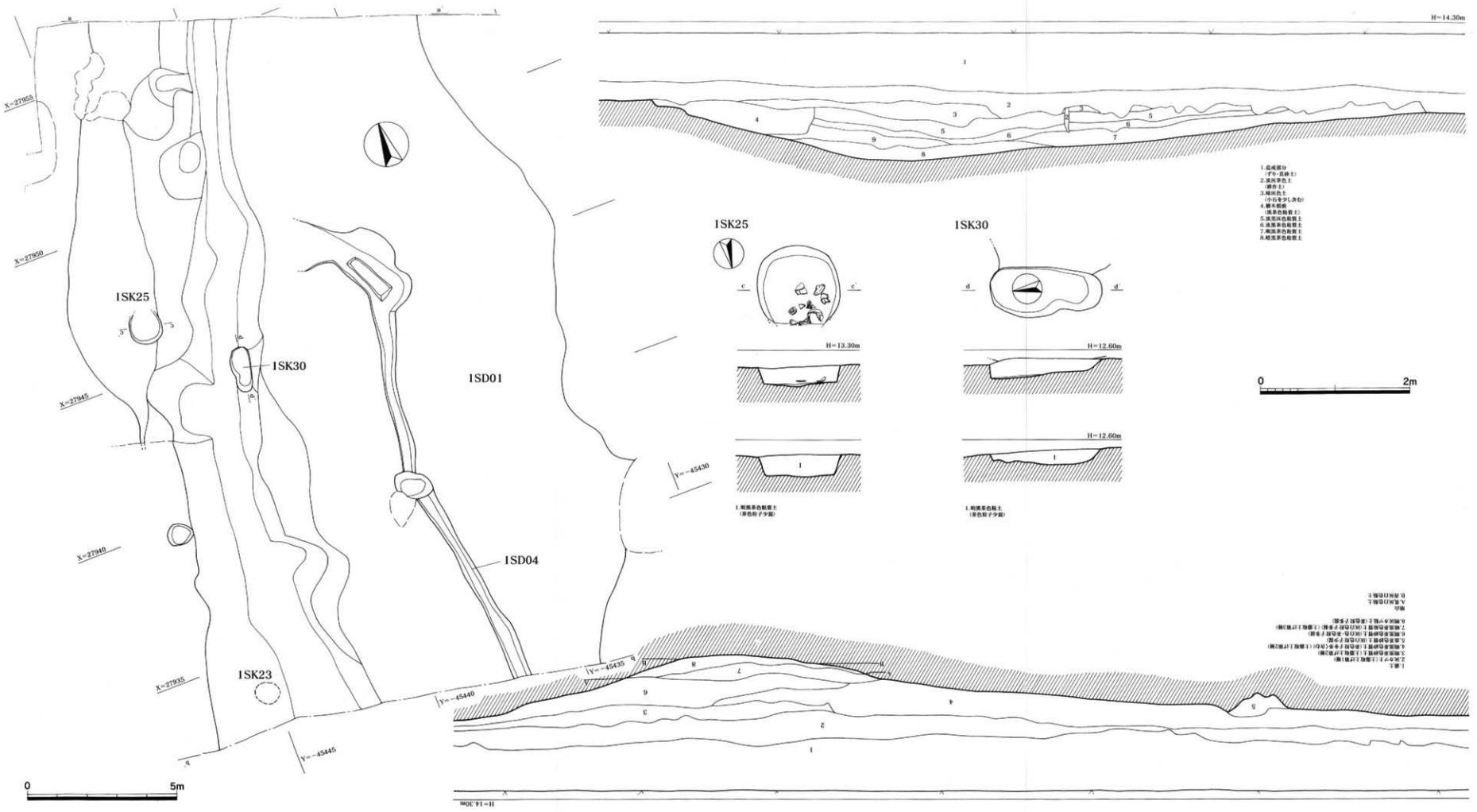


Fig.6 流路(1SD01)、土坑(1SK25・30)実測図(1/40・1/100)

## 溝

### 1SD04 (Fig.6)

1SD01の東岸を沿うように蛇行した南北溝で約17.0m分を検出した。当溝は1SD01堆積土である黒茶色砂質土下位で確認されており、幅0.30～1.75m、溝底のレベル差異は南高北低で1SD01へと流れ込むよう落ち込んだ状態で終息する。僅かに弥生土器（片）が出土したのみである。

## 土坑

### 1SK23 (Fig.6)

円形状の土坑であり、1SD01を切るように検出した。埋土は1SD01と類似した明黒茶色砂質土であり、調査当時は弥生土器（鉢・甕・壺）、土師器（小型丸底壺）の出土遺物に伴って確認された遺構（平面図上では点線にて復元）である。

### 1SK25 (Fig.6, Pla.6)

1SD01の西岸を切るように検出した円形状の土坑であり、幅1.1m、深さ0.27mを測る。埋土は明黒茶色粘質土の單一層で土坑内からは弥生土器（甕・壺・高壺）が散在的に出土した。

### 1SK30 (Fig.6, Pla.7)

1SD01中央付近で検出した不整椭円形状の土坑である。1SD01下位で検出したもので長軸1.48m×短軸0.53m×深さ0.26mを測る。埋土は暗黒茶色粘土を呈し、出土遺物は皆無であった。

## (2) 出土遺物

### 竪穴住居

#### 1SI50-P2 (Fig.7, Pla.8)

### 弥生土器

鉢（1） 細片で口縁端部はやや突出気味に丸味を帯びる。内面には横方向の刷毛目を認めるが、外面は著しく磨耗のため調整不明である。

#### 1SI50-P3 (Fig.7, Pla.8)

### 弥生土器

甕（2・3） 共に口縁部細片である。2はほぼ直線的に外反し、端部はヨコナデ、内外面はナデを施す。3はやや緩やかに外反し、内面はヨコナデ、外面は刷毛目後ヨコナデを施す。

#### 1SI50-P4 (Fig.7, Pla.8)

### 土師器

壺（4） 体部から底部にかけた細片と思われ、内外面にミガキが施される。

### 掘立柱建物

#### 1SB35-P1 (Fig.7, Pla.8)

### 弥生土器

甕（5） 口縁部細片で端部に粗く刻目が施される。内外面は工具ナデによる調整が認められる。

#### 1SB35-P2 (Fig.7, Pla.8)

### 弥生土器

壺（6） 脚部破片で外面に断面台形状の貼付突帯と沈線を施す。調整は外面刷毛目、内面は刷毛目及び工具ナデが認められる。

器台（7） 脚部の破片で受部と脚端部は欠損する。外面は縦方向の刷毛目、内面上位はナデ、下位は斜方の細かい刷毛目を施す。

#### 1SB40-P2 (Fig.7, Pla.8)

### 弥生土器

甕（8・9） 8は台付甕の底部細片でくびれ部径は4.2cmを復元する。内面には指頭痕、外面には刷毛目が認められる。9は口縁から体部にかけての破片で口径18.4cmを復元する。口縁部は「く字状」を呈し、

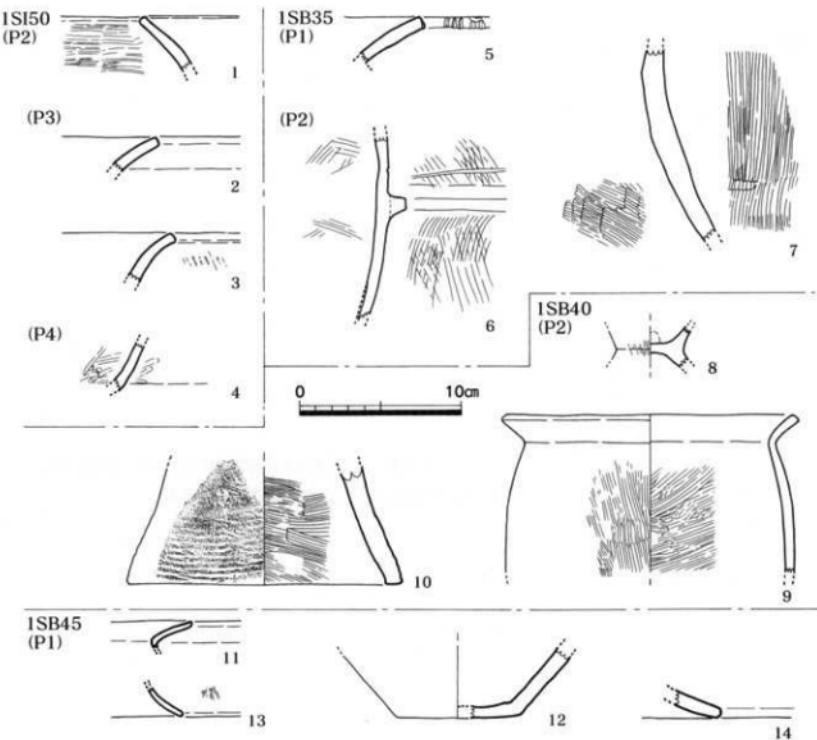


Fig.7 穹穴住居（1S150）、据立柱建物（1SB35・40・45）出土遺物実測図（1/3）

調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面刷毛目である。

器台（10）脚部の細片で脚部径は17.0cmを復元する。内外面は刷毛目調整である。

#### 1SB45-P1 (Fig.7, Pla.8)

##### 弥生土器

甕（11・12）11は口縁部細片で端部は僅かに摘み上げる。形状は「く字状」を呈する。12は平底を呈する細片で底径7.4cmを復元する。内外面はナデによる調整を施す。

高坏（13）脚端部細片である。外面に刷毛目調整を僅かに認め、端部外面はヨコナデ、内面はナデを施す。

#### 1SB45-P2 (Fig.7, Pla.8)

##### 弥生土器

高坏（14）脚端部細片で内外面はヨコナデである。

##### 流路

#### 1SD01 (Fig.8・9, Pla.8 ~ 9)

##### 弥生土器

甕（15～38）15は底径5.4cm、胴径9.9cm、を復元する。口縁部は欠損し、底部は平底を呈する。内外面はヨコナデ調整である。16は平底を呈する底部細片で底径は4.4cmを復元する。17は口縁部細片で「く字状」に僅かに摘み上げる。18～25は口縁部細片で口縁部の形状は「く字状」を呈し、18～22は胴部は大きく張り出すタイプ、23～25は胴部が張らないタイプである。26～28は同じく「く

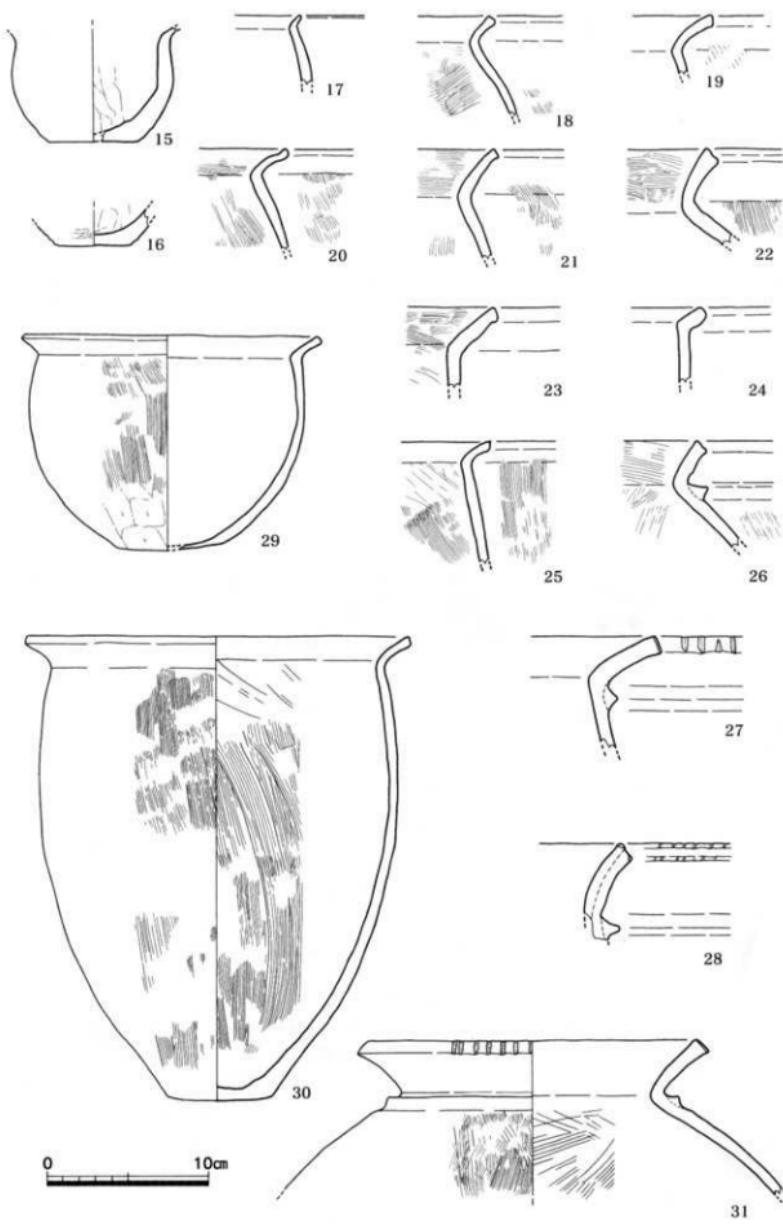


Fig.8 流路（1SD01）出土遺物実測図①(1/3)

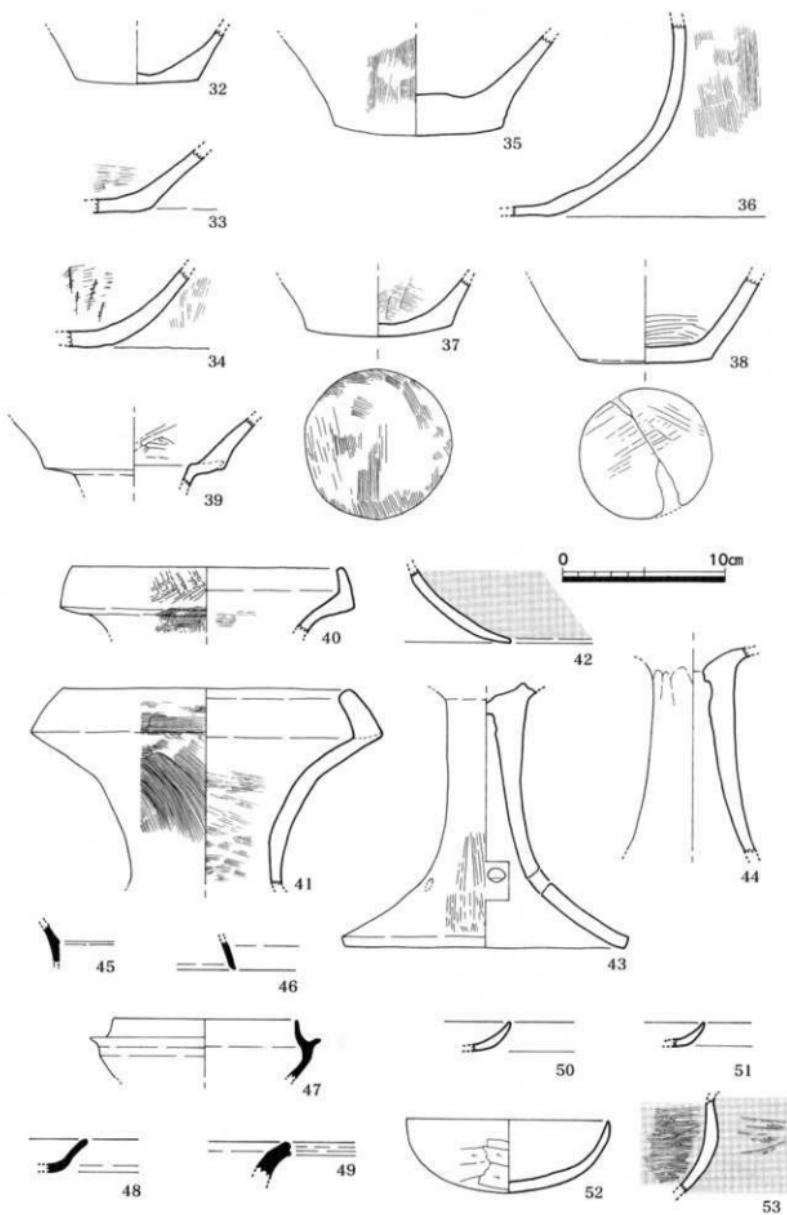


Fig.9 流路 (1SD01) 出土遺物実測図②(1/3)

字状」を呈する口縁部細片であるが、口縁部と胴部との外面境に断面三角形状の貼付突帯を施す。更に27・28には口縁端部に刻目を施す。29はほぼ完形であり、口径18.4cm、底径6.5cm、器高13.2cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部上位は縱方向の細かい刷毛目、内面及び外面の体部下位から底部にかけては工具ナデ、底部内面はナデである。30は口径23.6cm、底径6.3cm、器高28.4cmを測る。口縁部は緩やかな「く字状」を呈し、底部は「凸レンズ状」平底を呈する。胴部最大径は中位にあり、やや長胴化した胴部を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面上位は工具ナデ、胴部外面及び内面下位は刷毛目、底部内外面はナデである。外面に煤が付着する。31は屈曲の大きい「く字状」を呈し、外面に断面三角形の貼付突帯を施す。口縁端部には粗く刻目突帯を施し、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を施す。32～38は底部破片である。32は底径7.5cmを測り、「凸レンズ状」平底を呈する。底部から胴部へはシャープに斜方へ立ち上がる。33は「凸レンズ状」を呈するものと思われる、胴部は張り気味に外方へ立ち上がる。34は底部から胴部にかけて丸味を帯び、外面には刷毛目、内面には工具ナデを施す。35は大型壺の底部細片で底径10.3cmを測る。底部器壁は厚く、「凸レンズ状」平底を呈する。36は34と同様に底部から胴部にかけて丸味を帯び、胴部外面には刷毛目、内面には工具ナデを施す。底部は平底を呈する。37は「凸レンズ状」平底を呈する底部細片であり、底径9.0cmを測る。外底及び内面に刷毛目、外面にはナデの調整を施す。38は37と同じく「凸レンズ状」平底を呈する細片であるが、底部から胴部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。胴部内外面は工具ナデ、外底及び内底は刷毛目を施す。

壺（39～41） 39は二重口縁壺の口縁部細片である。頸部から大きく開いた後直立し、更に大きく外反する。内面にミガキ痕を認める。40は袋状口縁を呈する細片で端部はやや内傾気味に立ち上がる。口径16.6cmを復元し、口縁部の外面にタタキ、内面には工具ナデ、頸部の外面に細かい刷毛目、内面には横方向の刷毛目を施す。41は袋状口縁を呈する破片で口径17.6cmを復元する。内外面の調整は刷毛目を基調とする。

高杯（42～44） 42は脚端部細片で外面に丹塗りが施されている。43は脚部破片で脚底径17.6cmを復元する。現存器高は15.7cmを測り、脚底には内径1.2cm前後の穿孔を3ヶ所で認める。4ヶ所穿たれていたものと思われる。44は脚部細片で内外面の調整はナデを基調とする。

#### 須恵器

蓋（45・46） 45は天井部から体部にかけての細片で外面境に陵を認める。46は口縁部細片で口縁端部内側に陵を認める。

坏（47・48） 47は蓋受け及びかえりのある破片で口径11.3cmを復元する。かえりは短めで内傾しながら直立する。48は坏部の細片と思われる。底部から口縁部にかけて大きく外反し、内外面はヨコナデである。

壺（49） 口縁部細片で端部に沈線を施す。

#### 土師器

皿（50・51） 共に内湾した細片で摩滅のため内外面の調整は不明である。

坏（52） 口径12.4cm、器高4.45cmを測る。湾曲した器形を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての内面はナデ、外面は手持ちヘラケズリを施す。

#### 黒色土器

塊（53） 体部細片で内外面が焼されたB類である。内外面は横方向の細かなミガキが認められる。

1SD01トレチ（Fig.10、Pla.11・12）

#### 弥生土器

壺（54～62） 54は頸部屈曲の弱い細片で口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部外面は縱方向の刷毛目、胴部内面は工具ナデを施す。55・56は共に「く字状」口縁を呈する細片で57は大きく外へ湾曲した口縁部を呈する。58は胴部細片で最大径は23.8cmを復元する。屈曲した頸部

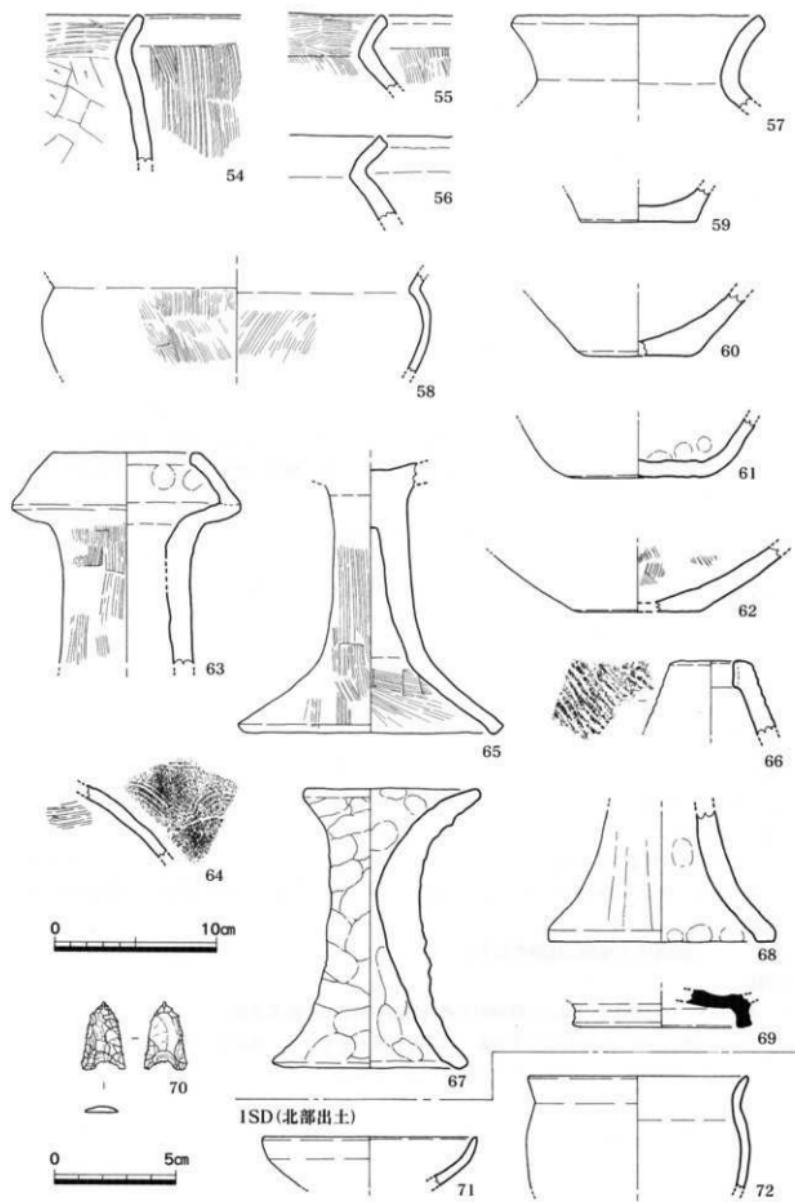


Fig.10 流路（1SD01 トレンチ及び北側）出土遺物実測図（1/3）

を呈し、調整は刷毛目を基調とする。59～62は何れも平底を呈する底部細片である。59は底径7.0cm、60は底径6.6cm、61は底径7.5cm、62は底径8.0cmを復元する。

壺（63・64）63は袋状口縁を呈する口径は8.9cm、口縁部最大径は14.0cmを測り、頸部はほぼ垂直に長く伸びる。袋状口縁の外面はナデ、内面は指押さえ、頸部外面は刷毛目、内面は表面剥離のため調整不明である。64は肩部細片で外面には5条の波状文と沈線が施されている。

高环（65）脚部破片で脚幅径は16.4cm、現存高は16.6cmを測り、調整は刷毛目を基調とする。

支脚（66）下部を欠損した細片である。上端の受部は円形状に開口しており、内径2.6cm前後を復元する。上端部から内面にかけてはナデ、外面にはタタキを施す。

器台（67・68）67は器形が大きく歪んでおり、口径10.95cm、底径12.0cm、器高17.0cmを復元する。調整は内外面に工具ナデ、指頭圧痕を認め、いたる箇所が著しく磨耗及び剥離している。68は上部が欠損した細片であり、底径は14.0cmを復元する。工具ナデ、指頭圧痕の調整を施す。

#### 須恵器

壺（69）高台径11.0cmを復元する。高台部及び内面はヨコナデ、高台内は回転ヘラ切りである。焼成、還元共に良好である。

#### 石器

石錐（70）石材はサヌカイト製で凸型の五角形を呈する。無茎式で長さ2.8cm、幅1.35cm、高さ0.2cm、重さ1.0gを計測する。表裏面中央部に剥離時のネガティブ面を残し、側辺部に細かいリタッチを加えて刃部を作り出している。

#### 1SD01北側（Fig.10, Pla.12）

##### 土師器

壺（71）口径13.2cmを復元する細片で口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は手持ちヘラケズリ、体部内面はナデを施す。

甕（72）頸部屈曲の弱い甕で口径13.6cmを復元する。器面は著しく磨耗しており調整は不明である。

#### 1SD01第1層：灰褐色土（Fig.11, Pla.12・13）

##### 弥生土器

甕（73～83）73は大甕の口縁部細片で口径41.0cmを復元する。口縁部は「く字状」を呈するものと思われ、口縁端部の上下に刻目を施す。頸部には断面三角形の突帯を貼付し、内外面の調整はヨコナデである。74は口縁部細片で緩やかに屈曲する口縁部を呈する。器面磨耗のため調整不明。75は口縁部が外方へ屈曲するもので、調整は磨耗のため不明である。細片資料のため器種は明らかではないが鉢に類するものとも捉えられる。76は口縁部が「く字状」に鋭く屈曲する細片で口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を施す。77は頸部屈曲の弱い「く字状」口縁を呈する口縁部細片で内外面はヨコナデの調整を認める。78は口径16.4cmを復元する。器壁は薄く口縁部は「く字状」を呈し、内外面は横方向の刷毛目を施す。79～83は底部細片である。79はやや絞り込んだ平底を呈し、底径8.2cmを復元する。80～83は「凸レンズ状」平底を呈し、82は底径8.0cmを復元する。

壺（84・85）84は二重口縁壺の口縁部細片である。頸部から大きく開いた後に直立し、更に大きく外反する。調整は明らかでないが、外面に輪状文の押印が施されている。85は袋状口縁壺の細片で口縁部内外面及び外面上位はヨコナデ、外面下位は刷毛目を施す。

器台（86・87）86は脚幅径18.0cmを復元し、現存高17.8cmを測る。内外面は刷毛目によって丁寧に仕上げられている。87はやや凹凸感のある器台で脚幅径15.7cm、現存高17.3cmを測る。やや荒めの刷毛目によって調整を施す。

##### 土師器

壺（88～91）88は内湾する口縁部を呈する細片で内外面に丹塗りが施されている。89は口縁端部が外反する壺で著しく磨耗しているため調整は不明である。90は底部細片で外底はヘラ切り離し。体部

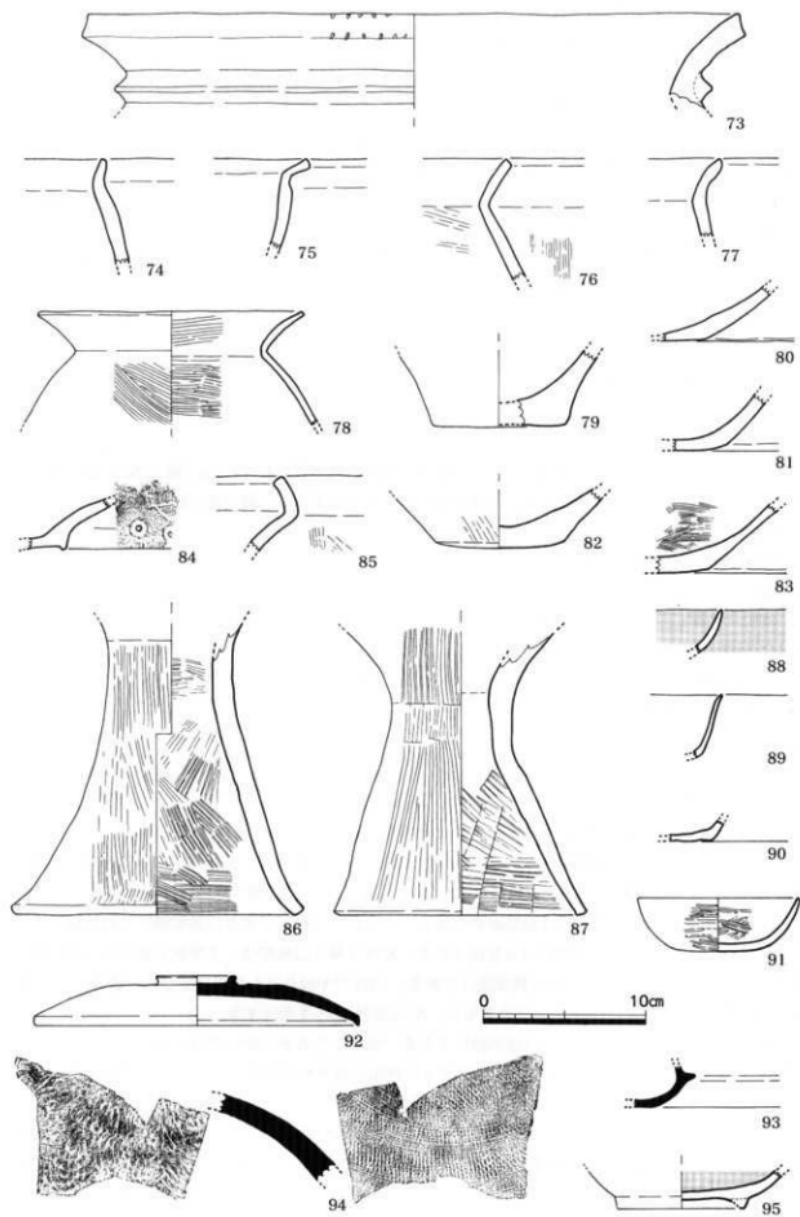


Fig.11 流路（1SD01 第1層：灰褐色土）出土遺物実測図（1/3）

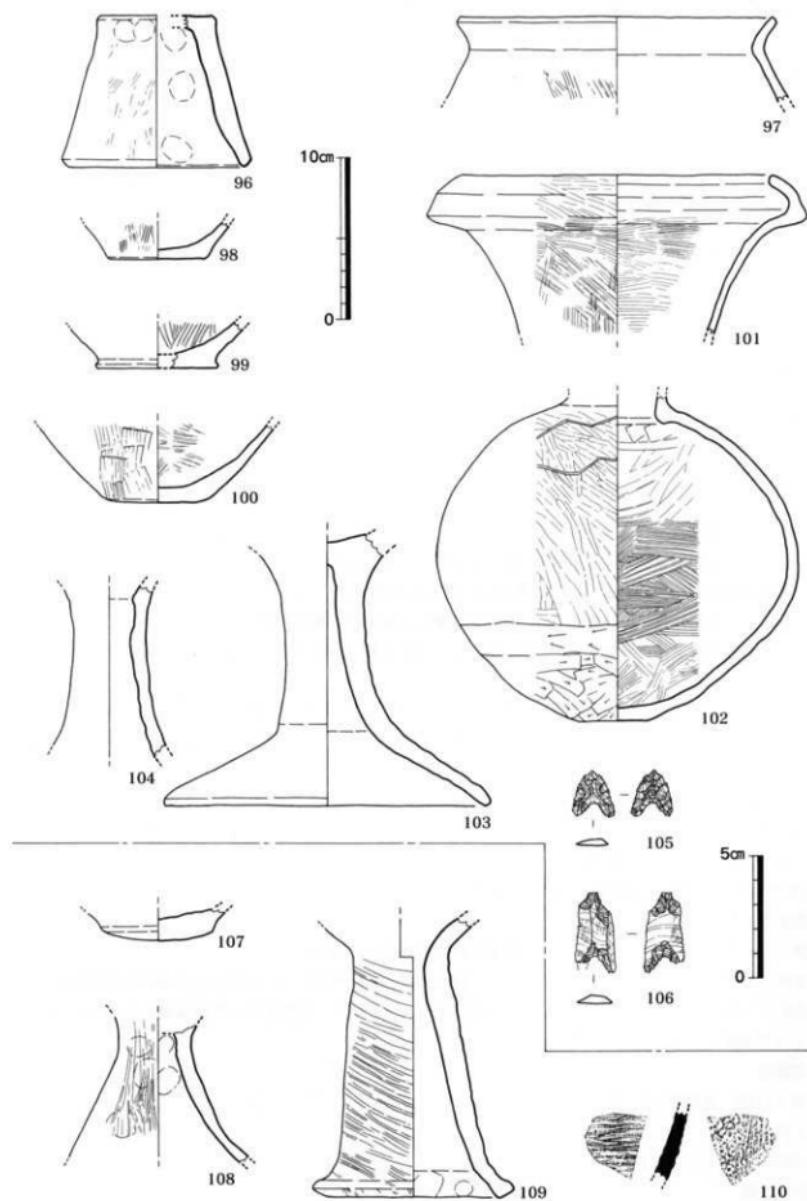


Fig.12 流路（1SD01 第2層：明黒茶色砂質土・第3層：暗黒茶色砂質土）出土遺物実測図（1/3）

内外面の調整はヨコナデである。91は壊身破片で口径10.0cm、底径5.4cm、器高3.25cmを復元する。内外面は丁寧にミガキを施されている。

#### 須恵器

蓋（92） 天井部に輪状つまみを呈する蓋で口径10.0cm、器高3.0cm、輪状部径4.9cmを復元する。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、口縁部内外面及びつまみ部はヨコナデを施す。口縁部断面形は三角形状を呈する。

坏（93） 受け部のある壊身細片でかえりは斜め方向に立ち上がる。

壺（94） 肩部細片で外面には格子目叩き後刷毛目、内面には同心円叩きが施される。

#### 黒色土器

壺（95） 内面が焼されたA類の壺で高台径は7.9cmを復元する。表面磨耗のため調整は不明である。

1SD01第2層：黒茶色砂質土（Fig.12、Pla.14）

#### 弥生土器

支脚（96） 上端径7.4cm、脚裾径11.7cm、現存器高9.35cmを測る。手捏ねのため器壁は均等ではなく指頭痕が多く認められる。

甕（97～100） 97は「く字状」口縁を呈する細片で口径19.8cmを復元する。刷毛目調整を基調とする。98～100は底部細片で98・99は平底、100はやや丸味がかった「凸レンズ状」平底を呈する。98は底径6.2cm、99は底径7.6cm、100は底径4.6cmを測り、何れも刷毛目調整を基調とする。

壺（101・102） 101は袋状口縁壺の破片で口径19.0cm、最大径23.5cmを復元する。口縁部は最大径に稜を呈し、内湾気味に立ち上がる。外面は刷毛目にて調整を施す。102はやや扁平した球胴形の壺で胴部中位に最大径を有し、22.3cmを測る。底部は平底で底径4.2cmを測る。調整は胴部内面の上位は工具ナデ、中位は目の粗い刷毛目、下位は目の細かい刷毛目、胴部外面の上位から中位はミガキ、下位から底部にかけてはヘラケズリである。肩部に二重の沈線文を意図的に半面のみ施しており、胴部外面は丁寧にミガキによって仕上げられている。

高坏（103・104） 103は割りに太く大きく開く脚部を呈した破片で脚裾径20.2cm、現存器高16.7cmを復元する。調整は磨耗のため不明である。104は器壁が薄く表面磨耗のため調整は不明である。

#### 石器

石鎌（105・106） 105は黒曜石製の抉りのある正三角形を呈した石材とし、表裏面及び側辺に細かいリタッチを加えて刃部を作り出している。106は表裏面に剥離時のネガティヴ面を大きく残した黒曜石製の石材を利用し、先端及び抉りにリタッチを加えて整形する。左脚端部を欠損する。

1SD01第3層：黒茶色粘質土（Fig.12、Pla.15）

#### 弥生土器

甕（107） 「凸レンズ状」平底を呈した底部細片で底径6.8cmを測る。

高坏（108） 脚部細片で大きく開脚する。表面には指頭痕が残り、外面は縦方向の刷毛目を認める。

器台（109） 上端部を欠損した破片で脚裾径は12.4cmを測る。器壁は厚く外面は斜め方向の刷毛目によって調整される。

#### 須恵器

甕（110） 体部細片で外面には格子目文、内面には同心円文の叩きが認められる。

#### 土坑

1SK23（Fig.13、Pla.15）

#### 弥生土器

鉢（111） 屈曲し外反する口縁部を呈する鉢細片で口縁部はヨコナデ、胴部内面は工具ナデ、胴部外面は縦方向の刷毛目を施す。

甕（112） 「く字状」口縁を呈する甕の破片で胴部の張りは弱い。口縁部はヨコナデ、胴部外面は刷

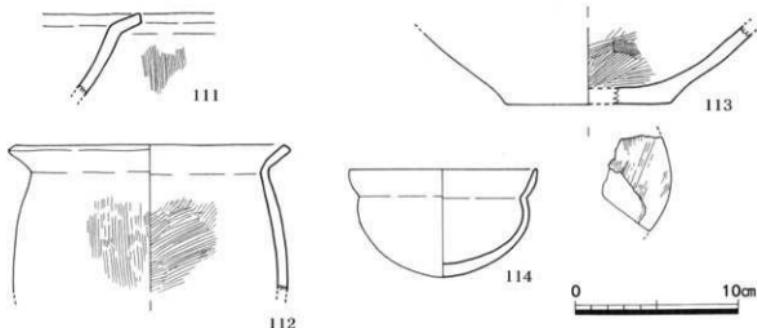


Fig.13 土坑（1SK23）出土遺物実測図（1/3）

毛目を施し、口径17.2cmを復元する。

壺（113）底部細片で底径10.2cmを復元する。底部は平底を呈し、底部内面及び外底は刷毛目、底部外面は工具ナデの調整を施す。

#### 土師器

小型丸底壺（114）屈曲した口縁部に底部が丸底を呈したいわゆる小型丸底壺のほぼ完形品である。口径11.5cm、器高6.65cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部及び底部はナデを基調とする。

#### 1SK25 (Fig.14, Pla.16)

#### 弥生土器

壺（115）胴部から底部にかけての破片で底部は「凸レンズ状」平底を呈する。底径8.0cm、現存器高20.0cmを測り、刷毛目を基調とする調整である。

壺（116～118）いずれも袋状口縁を呈する破片である。116は外反した頸部から鋭く屈曲した袋状口縁を呈し、口縁部外面はヨコナデ及び指押さえ、頸部外面は細かい刷毛目の調整を施す。117は強く外反した頸部にやや内傾した袋状口縁を呈し、口径21.5cm、口縁部最大径22.8cmを復元する。口縁部外面はナデ、頸部外面は刷毛目を施す。118は口径19.5cm、口縁部最大径21.7cmを復元する。肩部から大きく開いた頸部に袋状口縁を呈し、屈曲した袋状口縁外面に刻目を丁寧に施す。肩部及び頸部境に断面三角形の貼付突帯を廻らせ、口縁部外面はヨコナデ、頸部外面及び肩部外面は刷毛目の調整を認める。

高壺（119）緩やかに大きく聞く脚部破片で脚裾径は19.0cmを復元する。表面は著しく磨耗しており、脚部内面下位に僅かに刷毛目調整を認める。

#### 溝

#### 1SD27 (Fig.15, Pla.16)

#### 須恵器

壺（120）口縁部細片で口縁端部外面に2条の突帯を施し、端部は摘み上げる。外面はヨコナデ調整である。

#### 土師器

壺（121～126）121は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる壺細片で表面は磨耗のため調整は明らかでない。122は口径13.1cm、底径7.8cm、器高3.3cmを復元する。底部から口縁部にかけては緩やかに外反しながら立ち上がる。器表磨耗のため調整は不明である。123は口縁部細片で口縁端部を僅かに外反させている。124は丸底壺細片の口縁部で端部を僅かに外反する。磨耗のため調整不明。125・126は底部細片で共に表面が磨耗しており調整は不明である。

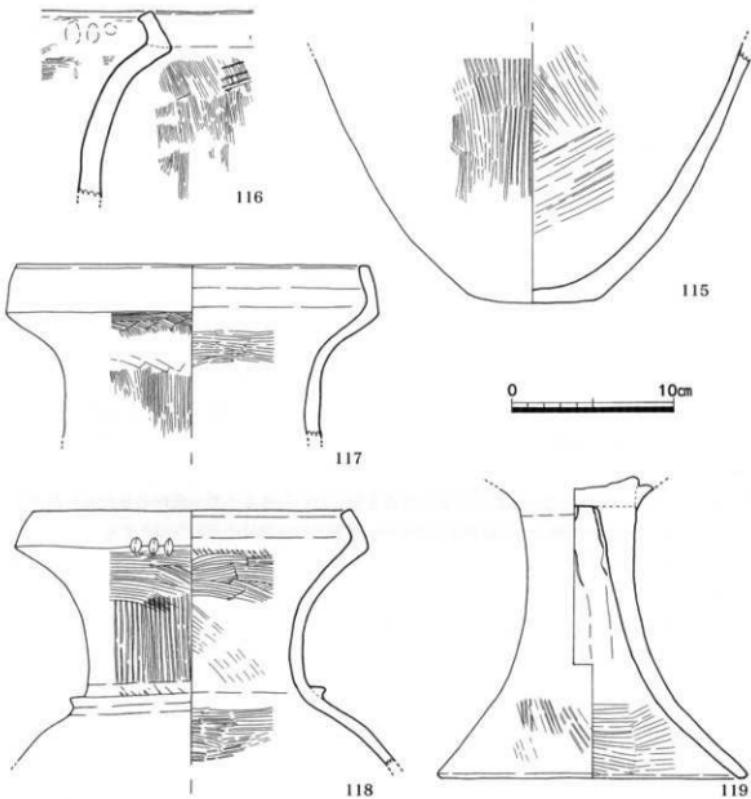


Fig.14 土坑（1SK25）出土遺物実測図（1/3）

塊（127）高台のある底部細片で表面は磨耗のため調整不明である。

土鍋（128）口縁部細片で端部は折り返して玉縁状口縁にする。

#### 黒色土器

塊（129・130）共に内面が焼されたA類である。129は底部細片で内面にミガキを施す。外面は磨耗のため調整不明。130は高台径9.9cmを測る底部細片で内面はミガキ、底部外面はヘラケズリ後ナデ、高台内は回転ヘラ切り後ナデの調整を認める。

#### その他の遺構

1SX03 (Fig.15, Pla.17)

#### 須恵器

壺（131）底部細片で体部内外面はヨコナデ、外底はヘラ切りである。

1SX20 (Fig.15, Pla.17)

#### 弥生土器

器台（132）脚部細片で器壁は厚く、外面は刷毛目、内面はナデを基調とした調整を施す。

### 表土 (Fig.15、Pla.17)

#### 須恵器

甕 (133) 口縁端部が下方へ屈曲した口縁  
部細片で内外面はヨコナデ調整を施す。

#### (3) 小結

#### 遺構と遺物について

当調査区からは竪穴住居1軒 (1SI50)、掘立柱建物3棟 (1SB35・40・45)、流路1条 (1SD01)、溝2条 (1SD04・27)、土坑3基 (1SK23・25・30)などを検出した。遺構からは弥生時代から中世までの幅広い出土遺物が得られたが、主体的には弥生時代後期から終末にかけての遺物が大半を占める。

当調査区からの主要な遺構は、竪穴住居 (1SI50)、掘立柱建物 (1SB35・40・45) の建物群であるが、各遺構からの出土遺物に恵まれていないため遺物が示す弥生時代後期から終末にかけての時期を想定せざるを得ない。

調査区中央部を貫通する流路 (1SD01) は、立地や遺構状況から自然発生した流路として捉えられる遺構であり、弥生時代後期から平安時代にかけての幅広い出土遺物が混入していた。主体的には建物群と同時期にあたる弥生時代後期から終末にかけての遺物が大半を占めるが、古墳時代における須恵器なども散在して認められた。その多くは、遺構の性格からみて周辺遺跡から流出した遺物が埋没過程において混入したこと

が考えられる。出土遺物には、主に集落遺跡で認められる蓋・环・甕・壺等の他に甕棺に使用される大型甕も含まれていたことから、弥生後期～古墳時代における集落遺跡、墓地等が流路の上流（当遺跡より南側方面）に広く展開していたものと想定される。溝 (1SD04) は僅かながら弥生土器を認めたのみであるため、時期断定については判断を欠くこととなる。当溝は、遺構の残存状況から1SD01へと流れ込む付設された溝と想定され、性格としては排水路の機能を持ち合わせていたものと思われ、このことから1SD01と同時期に存在していた可能性が考えられる。

1SD01付近で検出された土坑3基 (1SK23・25・30) については、何れも残存状態が悪く遺構の性格を窺い知ることはできない。出土遺物から1SK25を弥生時代終末、1SK23の下限を古墳時代前期と比定しておきたい (1SK30は出土遺物が皆無であったため時期不明)。

#### 土地利用について

弥生時代の農耕を主体とする集落には、一般的に住居・水田・墳墓・貯蔵施設・広場・工房など様々な施設が存在していたとされる。このうち、当調査区で確認された竪穴住居 (1SI50) 及び掘立柱建物 (1SB35・40・45) は、住居・貯蔵施設・工房などの居住域に相当する遺構と捉えることができるが、弥生時代の居住域は、主に低台地や低丘陵・微高地といった場所へ設けられることが多く、それは概ね

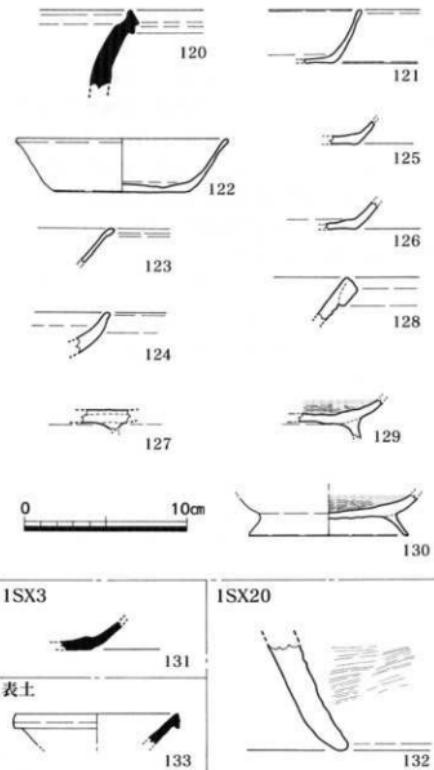


Fig. 15 溝 (1SD27) 及び  
その他の遺構 (1SX03・20・表土)  
出土遺物実測図 (1/3)

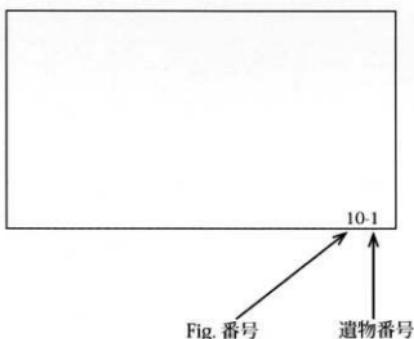
古墳時代までは継続する傾向が見受けられる。今回、竪穴住居等が確認された場所は、東側に隣する場所よりも現状で0.5～0.7mほど高い、標高13.7m前後の低位段丘上に存在しており、先に述べた低丘陵域に立地した集落であったと考えられる。

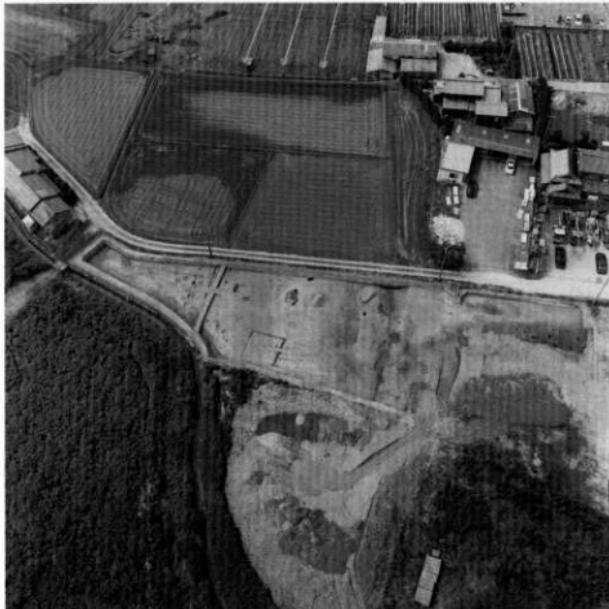
さて、この居住域の東側には南北に貫通する自然流路（1SD01）が検出されており、出土遺物の状況から少なくとも弥生時代後期には存在していたことが明らかである。1SD01は、当調査区北側を西流する現在の一級河川「広川」に流れ込んでいたと想定され、この広川の左岸部一帯、つまり1SD01を挟んだ対岸にあたる空間には広大な低地が広がっている。これらの立地状況、検出状況、1SD04の機能などを踏まえると流路を挟んだ対岸にあたる空間には、水田の存在を想像することができ、先述した1SD01の右岸で確認された溝（1SD04）は、この水田に付設された排水路であった可能性も考えられる。当調査区において水田を確認したわけではないが、存在そのものを否定することもできない。当該期の集落遺跡について解明されない課題は未だ多く残されているが、当調査区において上述した弥生時代の集落関連遺構を確認するなど貴重な資料を提供できたことは成果であり、今後の調査に生かされることであろう。

# PLATE

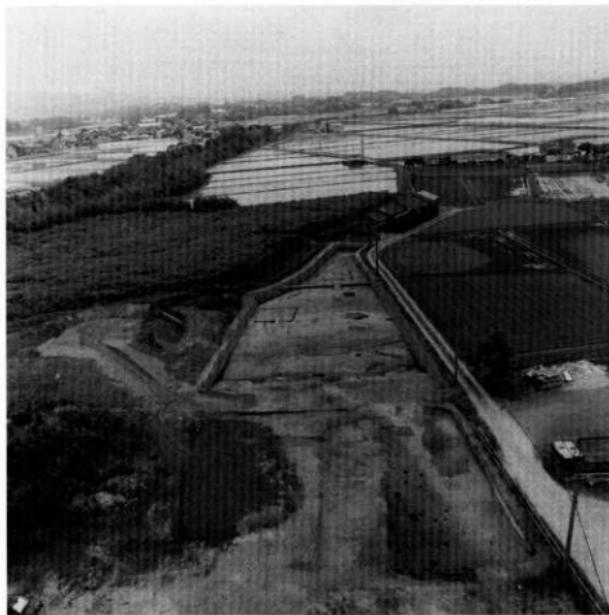
## 凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

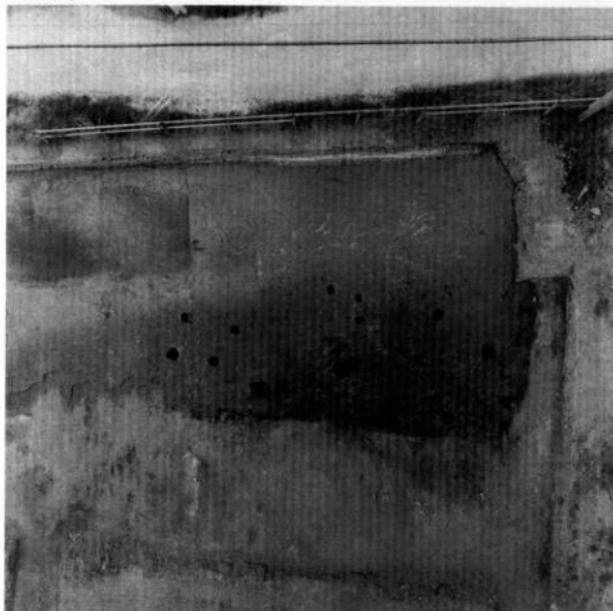




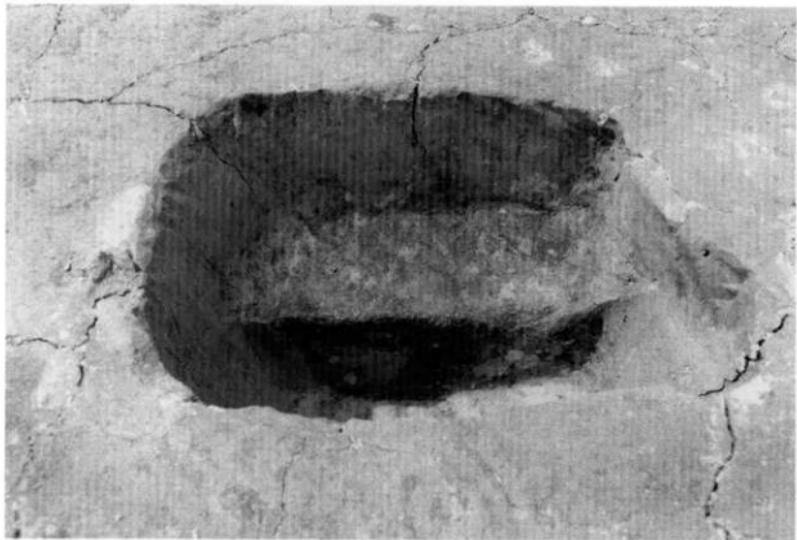
調査区全景  
(上が南)  
空中写真



調査区遠景  
(上が東)  
空中写真



豊穴住居及び  
掘立柱建物群完掘状況  
(上が南)  
空中写真



1SB35-P1 土層断面状況

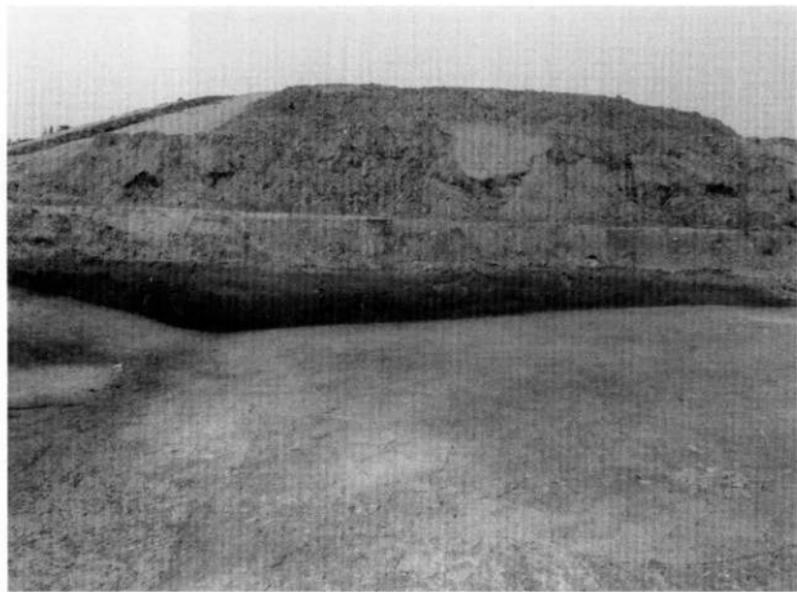


1SB35-P2 土層断面状況



流路及び溝完掘状況  
(上が東)  
空中写真

Pla.4





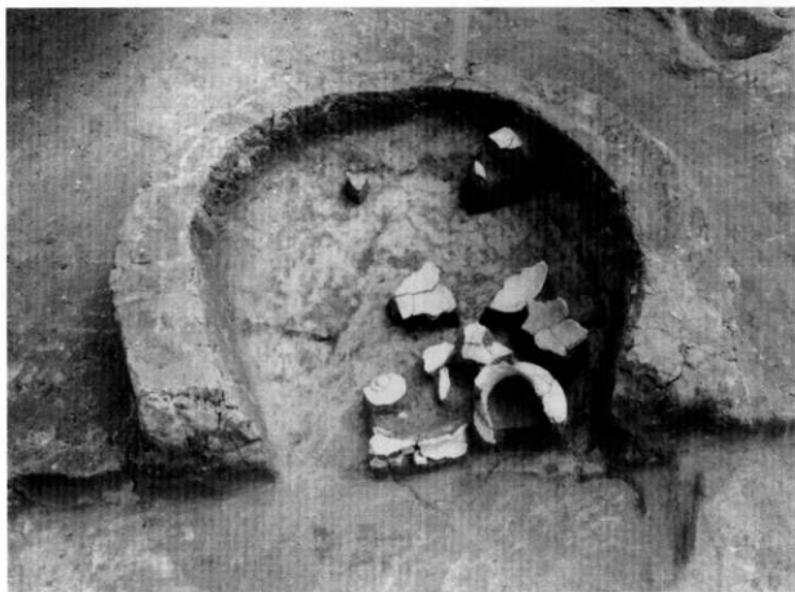
1SD01 南側土層断面状況（北東から）



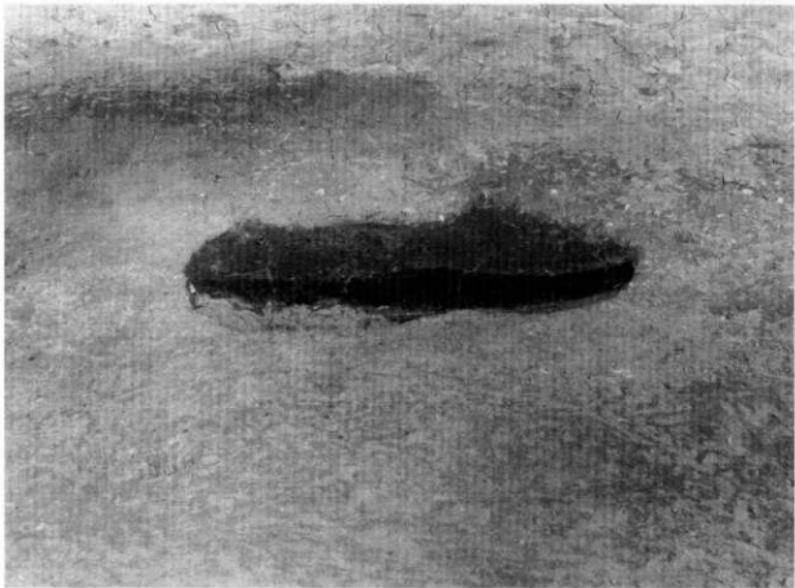
1SD01 南側土層断面状況（北西から）



1SK25 土層断面状況（北から）



1SK25 土器出土状況（北から）

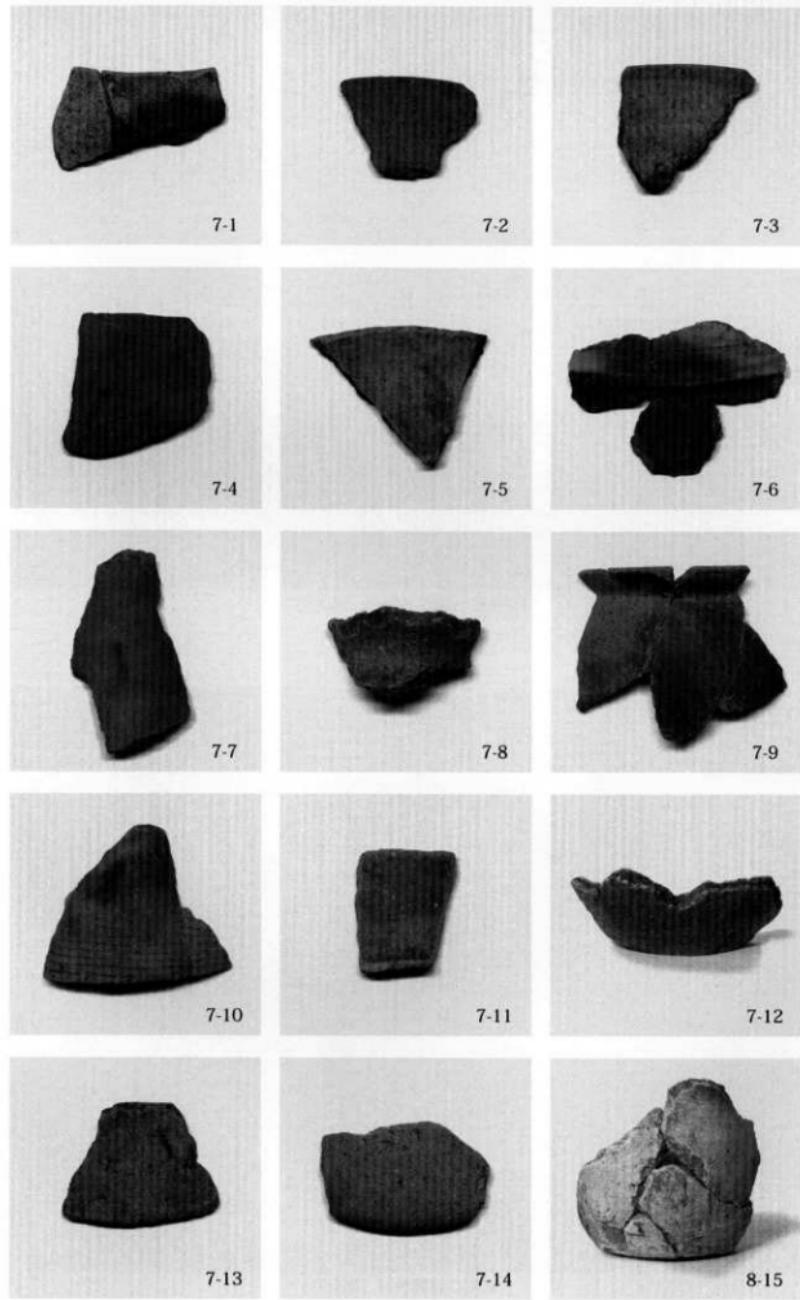


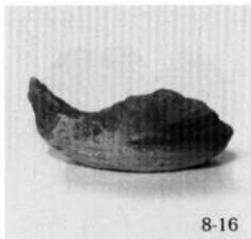
1SDK30 土層断面状況（西から）



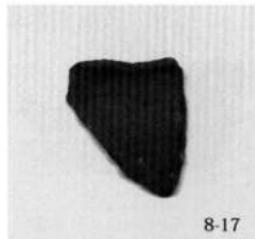
1SDK30 完掘状況（南から）

Pla.8

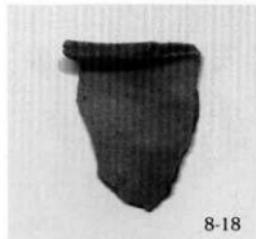




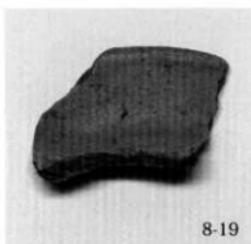
8-16



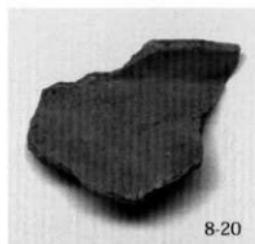
8-17



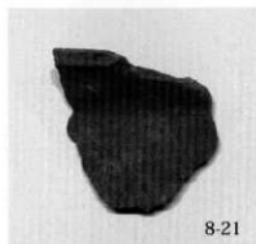
8-18



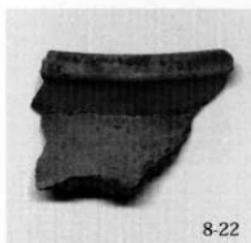
8-19



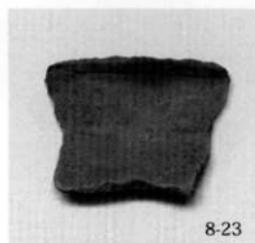
8-20



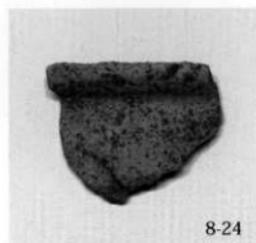
8-21



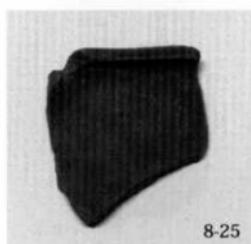
8-22



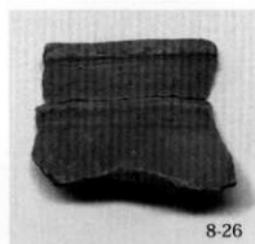
8-23



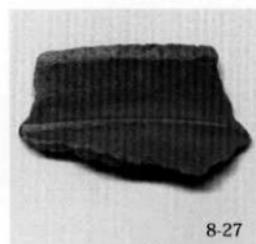
8-24



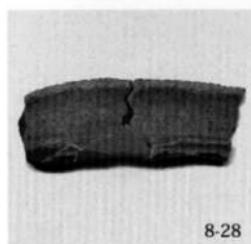
8-25



8-26



8-27



8-28

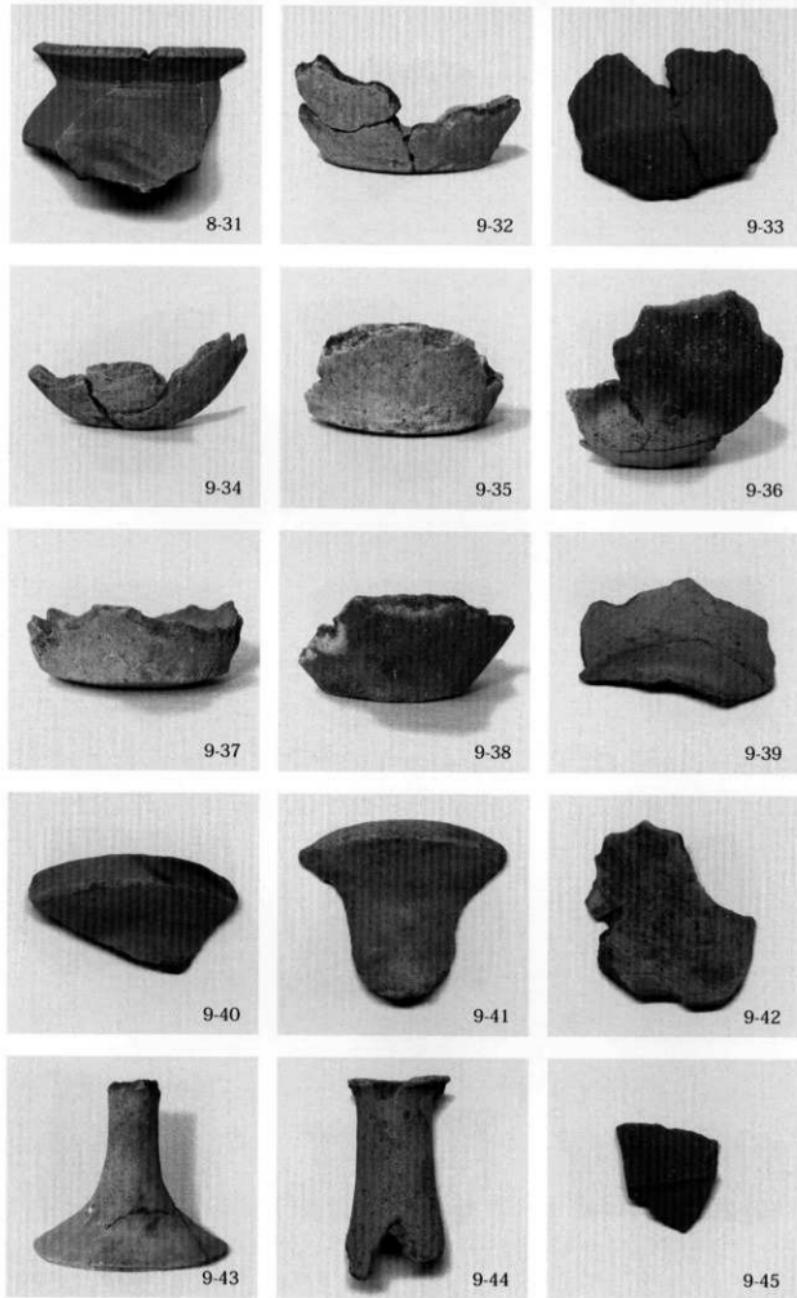


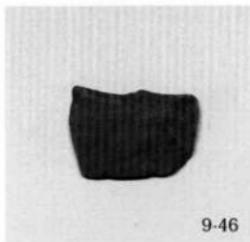
8-29



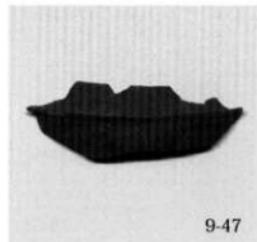
8-30

Pla.10

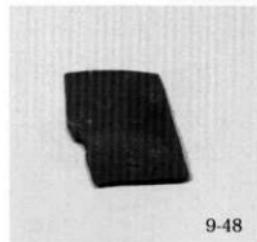




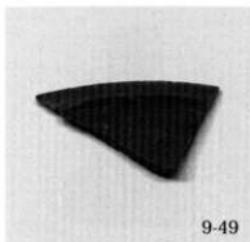
9-46



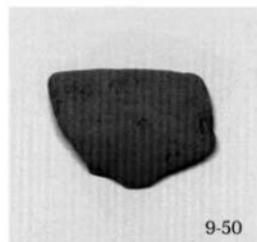
9-47



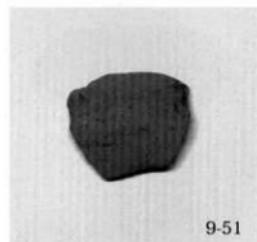
9-48



9-49



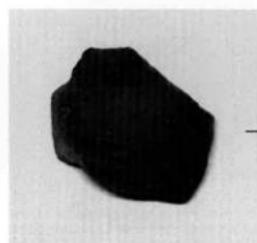
9-50



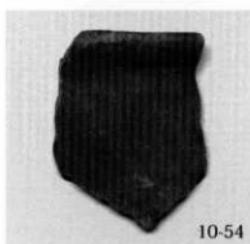
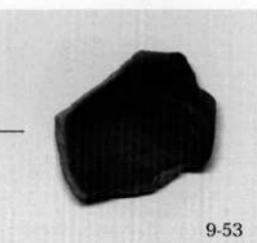
9-51



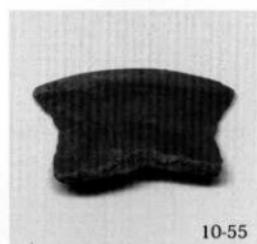
9-52



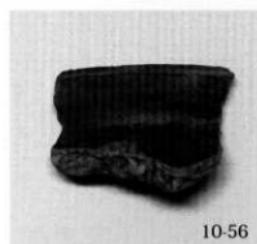
9-53



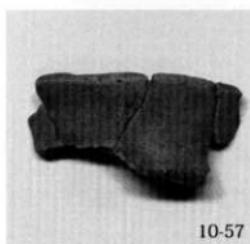
10-54



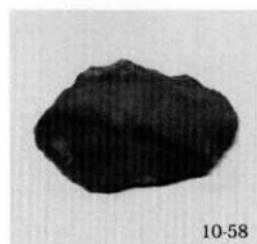
10-55



10-56



10-57

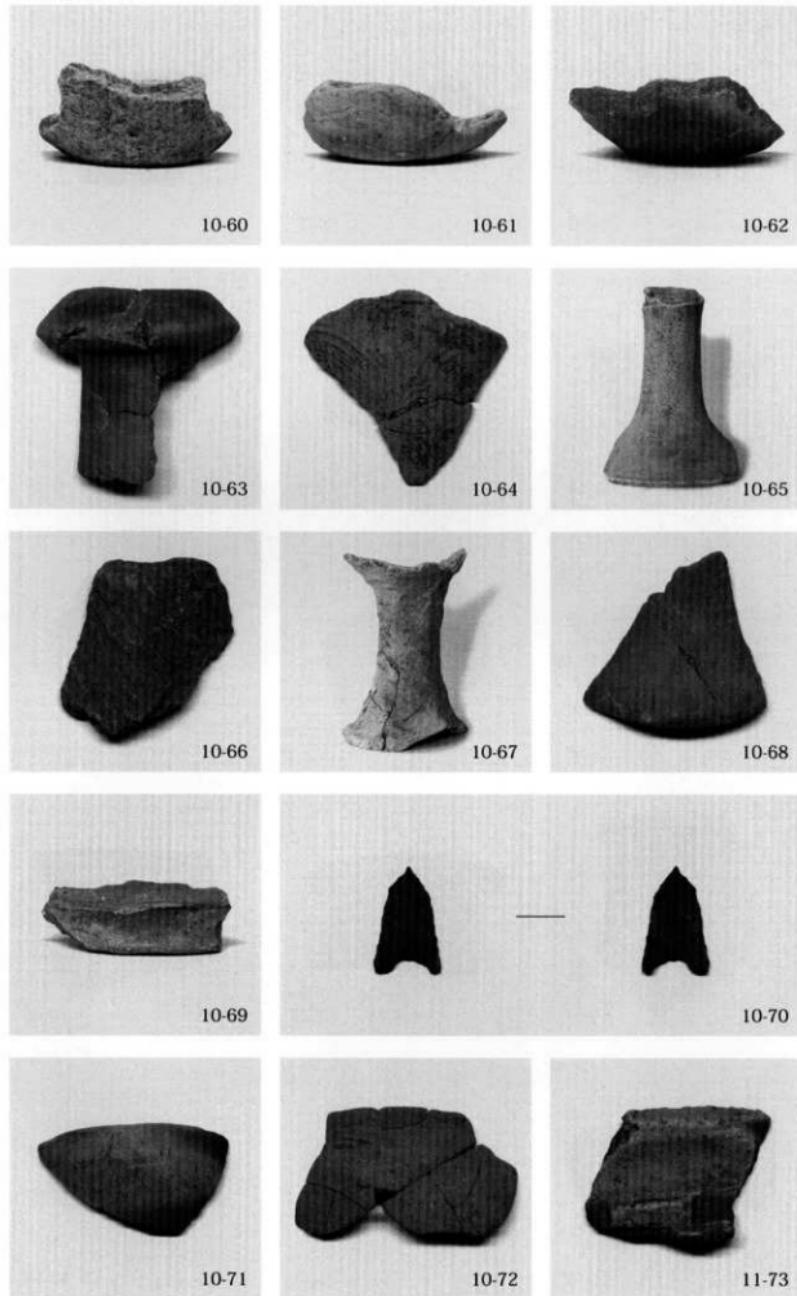


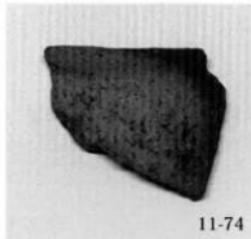
10-58



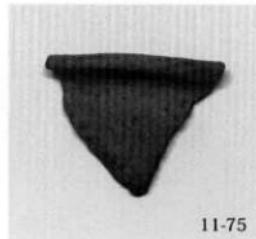
10-59

Pla.12

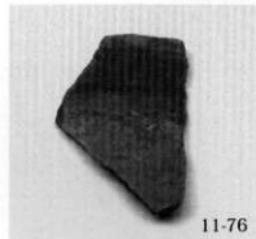




11-74



11-75



11-76



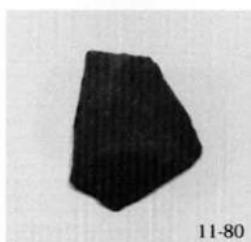
11-77



11-78



11-79



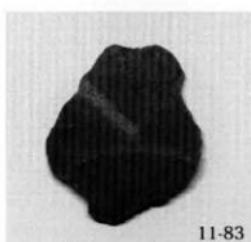
11-80



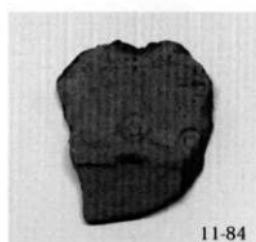
11-81



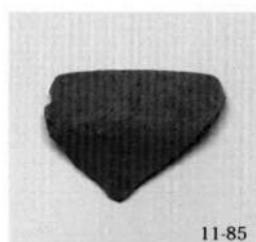
11-82



11-83



11-84



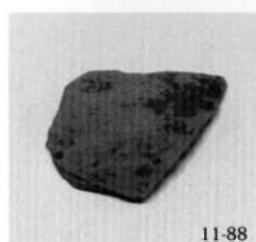
11-85



11-86

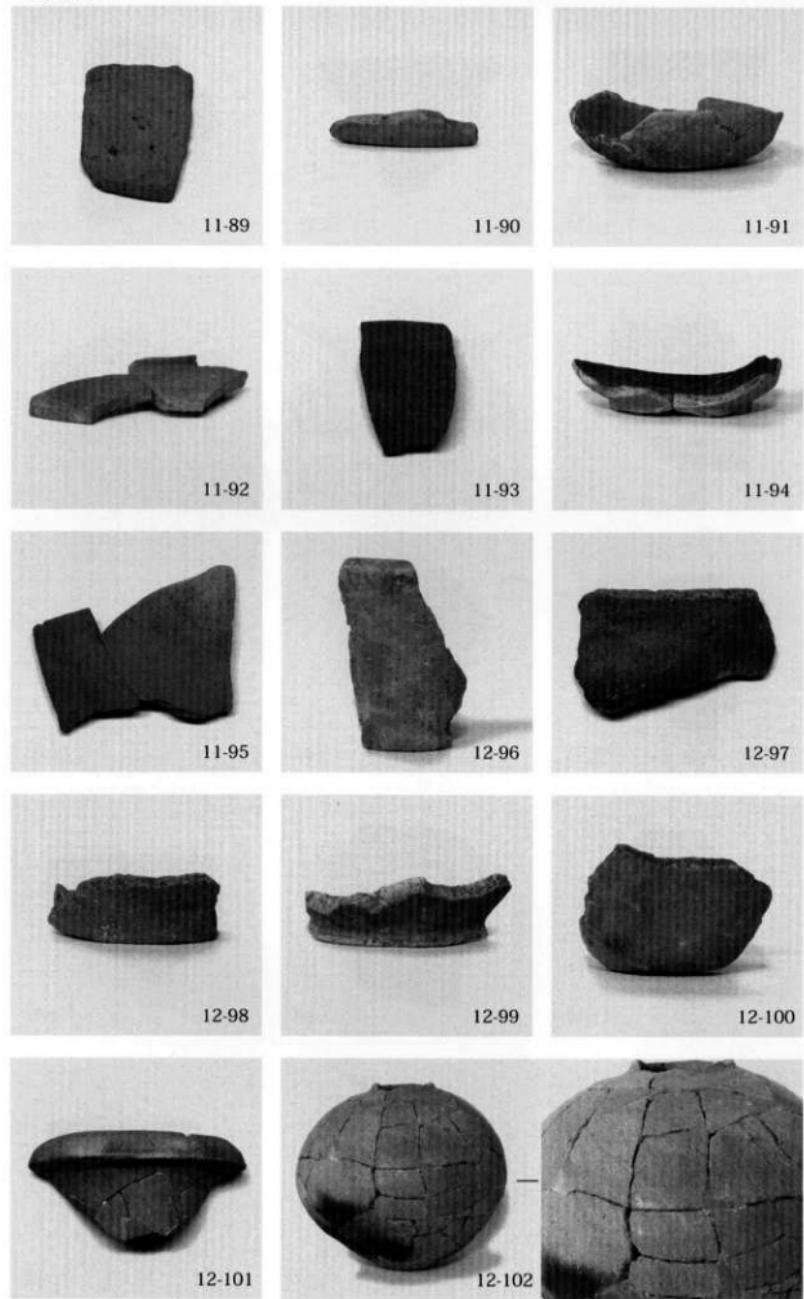


11-87



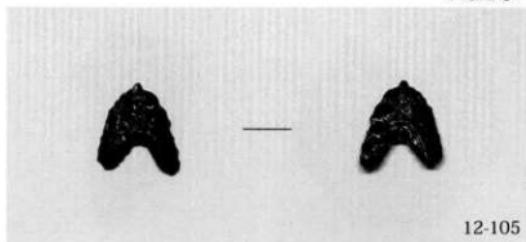
11-88

Pla.14





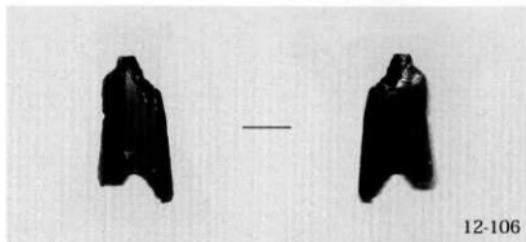
12-103



12-105



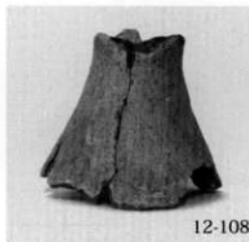
12-104



12-106



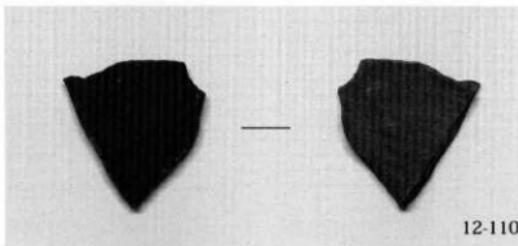
12-107



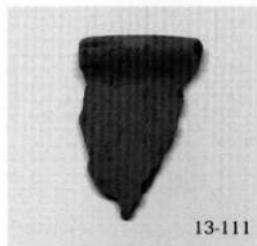
12-108



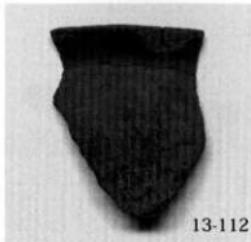
12-109



12-110



13-111



13-112



13-113

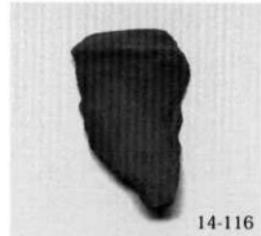


13-114

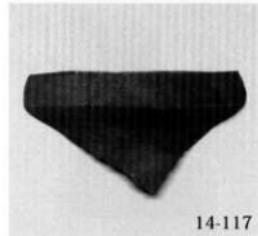
Pla.16



14-115



14-116



14-117



14-118



14-119



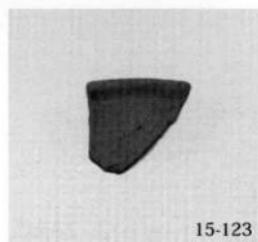
15-120



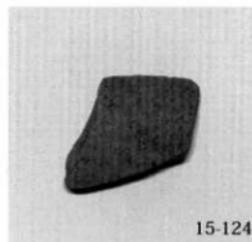
15-121



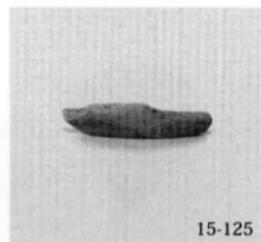
15-122



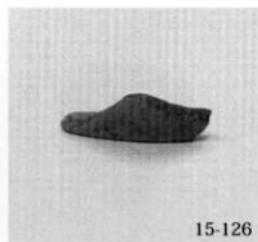
15-123



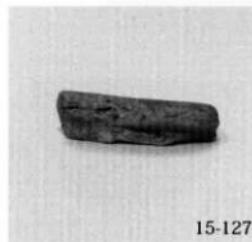
15-124



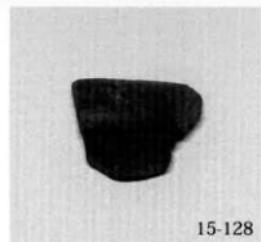
15-125



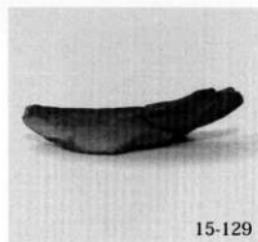
15-126



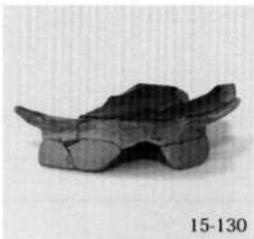
15-127



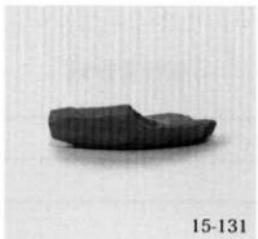
15-128



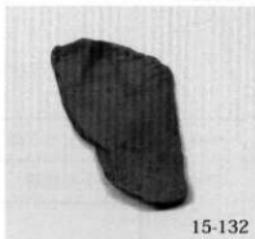
15-129



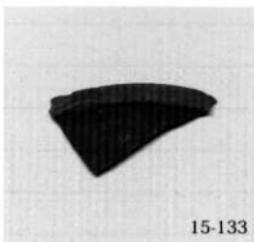
15-130



15-131



15-132



15-133

一条小原遺跡

筑後市文化財調査報告書

第78集

平成18年3月

発行 築後市教育委員会  
福岡県筑後市大字山ノ井898番地  
TEL (0942) 53-4111

印刷 大道印刷株式会社  
福岡県春日市日の出町6丁目23番地  
TEL (092) 582-0927